

ブラジル鳥取県人会県費留学・研修制度 50 周年 ブラジル・鳥取交流センター設立 20 周年記念式典

鳥取県議会訪問団 報告書

平成27年11月6日（金）～12日（木）



鳥取県議会

1. 訪問日程及び訪問先

平成27年11月6日（金）～12日（木）

ブラジル連邦共和国サンパウロ州 詳細は「4. 主な訪問日程」のとおり

2. 訪問団メンバー

○鳥取県

鳥取県議会 斉木正一議長、伊藤保議員、濱崎晋一議員、加藤係長

鳥取県 林副知事、山下交流推進課課長補佐、桑谷係長

○民間

鳥取ブラジル交流団体連絡協議会（21名）

3. 所感

「ブラジル鳥取県人会県費留学・研修制度 50 周年並びにブラジル・鳥取交流センター設立 20 周年記念式典」がブラジル・鳥取交流センターにて開催された。

県費留学・研修制度は、ブラジル在住鳥取県出身子弟に本県での修学の機会や先端技術等の習得の機会を設けることで、ブラジルでの社会的・経済的・文化的地位の向上、ブラジルの経済発展に貢献する人材を育成することなどをねらいとした制度である。今年までに合計 62 名が留学生として鳥取大学、米子高専、鳥取環境大学で医学・農学・機械工学・デザインなどの専門分野を学習し、37 名が技術研修員として鳥取大学や民間企業で技術習得を行ってきた。

過去の留学生等にお話を伺ったところ、「自分の子どもに是非とも母国の素晴らしさを伝えたくて希望した。母国の文化に触れ次の世代に伝えていくことが自分に与えられた使命である」「日本語のレベル向上と日本に居住することで身についた文化や日本人の価値観が日系企業に就職する際に役立っている」「日伯交流をしっかりと継続させるためには、交流に熱心な親が中心となって子や孫の世代に対し交流の場を提供することが必要」など皆さん熱心に話をされている姿がとても印象的であった。

留学生・研修生にとって、これらの事業は帰国後日系企業への就職や起業に大いに役立っている現状を鑑みると、留学生・研修生OBと県が連携することで、BRICSの一角をなし2億人を超える人口を擁するブラジルとの経済連携の可能性を有しており、本県経済の発展に大きく寄与するものと考えられる。今度も事業継続する価値は十分あると考える。

ブラジル・鳥取交流センターは、ブラジル鳥取県人会の活動の拠点として、じゃんけん傘踊り、銭太鼓、俳句、ダンス、日本語教室など毎日講座が開講され他の県人会に例を見ないほど活用されているとのこと。また、県人会員の利用だけでなく近隣住民も利用されているとのことで地域コミュニティの拠点施設として20年の歴史を積み重ねてきた。世代を重ねるごとに日系人としてのアイデンティティの希薄化が懸念される中で、交流センターは自分が日系人であり鳥取県とつながりを持っていることを再認識する場となっているとの話があり、交流センターの役割の大きさをあらためて感じ取ることができた。

また、現在、ブラジル鳥取県人会では、日系1世である本橋会長を中心に様々な活動を行っている。本橋会長は、昨年3月ブラジル日本都道府県人会連合会会長に就任するなど日本とブラジルの交流の架け橋となって精力的に活動されている。現在のブラジル

の日系人社会は、3世、4世の時代に入り、家庭においても日本語を使う機会が減っているなど日本との繋がりを意識する機会が減っており、会長は日ごろからこういった状況に危機感を感じ、母県を意識した活動を重視しているとのことであった。

我々も日ごろから県人会の活動を意識しつつ、現在活発に実施されている民間レベルでの交流事業が永続的に実施されるよう県議会としても引き続き応援していくべきである。

日系人はブラジル全体で160万人を超えたと言われ、サンパウロでも100万人が様々な分野で活躍している。日本移民の歴史がブラジル農業や製造業等様々な分野の発展に大きく貢献しており、今もなおその歴史はブラジル社会で高く評価されている。ブラジルにおける日本人への信頼は高く、日本人や日系人を表す言葉として、「ジャポネース・ガランチード（保証付きの日本人）」、つまり「約束を守り責任を持って役割を果たす人」とされ、教育水準が比較的高く、社会的に高い地位の職業に就職している人が多く、経済水準も高いとされている。

現在のブラジルの政治情勢や経済情勢には不安材料はあるものの、来年のリオ五輪への期待、拡大する日系社会への期待等が日本企業にとって魅力的な要因として働き日本企業の投資が活発である。また、豊富な資源、農業や製造業を中心とした活発な産業、増加し続ける人口が海外での市場価値を高め、今後とも経済成長が大いに見込める国であることも今回の訪伯で確認できた。

本県とブラジルとの関係は、ブラジル鳥取県人会を中心とした行政・民間レベルでの交流が盛んであり今後とも着実に交流を積み重ねていかなければならない。一方で、本県と繋がりの深い日系人がいることは我々にとっての強みであり、経済連携の可能性も秘めていることは前述したとおりである。我々訪問団が遠く離れたブラジルの地で感じた日本型のおもてなしへの感謝を忘れることなく、また、県人会の皆さんが繰り返し「母県」と慕われるに相応しい鳥取県とすべく県議会としても邁進してまいる所存である。

4. 主な訪問日程

月 日	行 程	
11/6 (金)	16:30~21:00 23:35	鳥取 → 関西国際空港 関西国際空港発 (EK317 便、フライト時間 11 時間 10 分) 【機内泊】
11/7 (土)	05:45 10:15~19:30	ドバイ国際空港トランジット ドバイ国際空港 → サンパウロ国際空港 (EK261 便、フライト時間 15 時間 15 分) 【サンパウロ泊】
11/8 (日)	10:00~15:00 16:00~17:30 19:00~	県費留学制度 50 周年・センター設立 20 周年祝賀会 (ブラジル・鳥取 交流センター) 日本移民史料館視察 ブラジル鳥取県人会主催歓迎交流会 【サンパウロ泊】
11/9 (月)	09:30~11:00 13:30~14:15 15:00~16:00 18:30~	記念植樹 (サンパウロ州環境局森林院森林公園内) 開拓先没者慰霊碑参拝 (イビラプエラ公園) 在サンパウロ日本国総領事館表敬訪問 大志万学院訪問 【サンパウロ泊】
11/10 (火)	8:30 10:30~15:00 16:30~17:30	ホテル発 東山農場視察 サンパウロ美術館見学 【ホテルで休憩後空港へ】
11/11 (水)	01:25~21:25	サンパウロ国際空港 → ドバイ国際空港 (EK262 便、フライト時間 : 14 時間) 【機内泊】
11/12 (木)	03:00~16:50 17:30~22:00	ドバイ国際空港 → 関西国際空港 (EK316 便、フライト時間 : 8 時間 50 分) 関西国際空港 → 鳥取

5. 主な訪問結果

(1) ブラジル鳥取県人会県費留学・技術研修制度50周年並びにブラジル・鳥取交流センター設立20周年記念式典

ブラジル鳥取県人会の活動拠点となっている「ブラジル・鳥取交流センター」において、「ブラジル鳥取県人会県費留学・技術研修制度50周年並びにブラジル・鳥取交流センター設立20周年記念式典」に参加した。

鳥取県からのブラジル移住の歴史は、今から100年以上前の明治39年に単身でブラジルに渡られた明徳梅吉（あけほうめきち）氏に始まり、昭和2年には、今の岩美町、当時の大岩村長の橋浦昌雄（はしうらまさお）氏が第二アリアンサへ移住団を率いて本格的な移住が始まった経緯がある。

また、ブラジル鳥取県人会は昭和27年の鳥取大火に際し、郷土の大火へ義捐金を集めようと、鈴木栄蔵（すずきえいぞう）氏、徳尾恒壽（とくおつねとし）氏らが中心になって設立（当時は「在伯鳥取県人会」）されたという。

記念式典では、日伯両国国歌の斉唱で始まり、先没者への黙祷の後、斉木議長、林副知事ら挨拶を行った。

斉木議長は、「未開拓地の過酷な自然環境や労働環境、言語、習慣が異なるブラジルでのご労苦を乗り越え、ブラジルの発展に貢献された先人に敬意を表し、県人会の今後の発展を祈念する。故郷である鳥取県は県外からの移住者も増え全国からも注目されており、県議会としても郷土鳥取県を更に住みやすく、活力と魅力ある自治体とすべく引き続き努力してまいる所存である。」と述べた。

平井知事からは、「この鳥取の県人会からは本橋会長が県連会長に就任され、日伯交流の中心として安倍総理を始め大きな信頼を得ながら交流が進んでいることは誠に喜ばしい限り。」などと述べるビデオメッセージが放映され祝意を表した。

本橋ブラジル鳥取県人会長からは、母県である鳥取県からの支援や交流活動に対する謝意が述べられるとともに、今後も引き続きの支援、交流継続の要請があり、鳥取県、鳥取県議会、ブラジル鳥取友好議員連盟のほか、民間交流団体等に対し感謝状の贈呈があった。また、副知事から、日系三団体（ブラジル日本文化福祉協会、サンパウロ日泊援護協会、ブラジル日本都道府県人会連合会）及びブラジル鳥取県人会に対し、斉木議長からはブラジル鳥取県人会に対しそれぞれ激励金を贈呈した。

また、県費留学・研修制度50周年を記念して西坂アンドレ幸次理事より、「県の支援に感謝。自分も鳥大医学部で学び多くのものを得た。将来自分の子どもにもチャンスを与えたい。」、ブラジル・鳥取交流センター設立20周年を記念して千田伊藤初美副会長より「当初は利用が少なかったが今は週400人が出入りする施設となった。次世代の育成・交流に力を入れていきたい。」と延べた。

最後に、鳥取県民歌「わきあがる力」を全員で合唱して、式典は幕を閉じた。

ブラジル・鳥取交流センターは、ブラジル鳥取県人会の活動の拠点として会員同士の交流及びブラジルと鳥取との交流がさらに深化することを目的に平成7年に設立。しゃんしゃん傘踊り、銭太鼓、俳句、ダンス、日本語教室など毎日講座が開講され、他の県人会に例を見ないほど活用されている。なお、今年11月21日には県人会コーラス部32名が来県し、鳥取県内のコーラス団体とコーラス交流を行った。

県費留学・研修制度は昭和40年に事業が発足。日本の技術習得、修学の機会を設けることでブラジル国内での社会的、文化的、経済的地位の向上とブラジルの経済発展

に寄与するための制度。第1回の上添勝子氏を鳥取大学に受け入れて以来 50 年を迎え、今年までに 99 名が本県で就学、技術取得している。



記念式典



ブラジル・鳥取交流センター

記念式典後、記念祝宴も開催され参加させていただいたが、伊藤議員、濱崎議員の祝辞に続き、県人会所属サークルの芸能披露が行われた。伊藤議員は、地元琴浦町出身のアーチェリー川中香緒里選手がリオ五輪に出場するので県人会からも是非とも応援して力を与えてあげてほしいこと、濱崎議員は、会館が建築中だった最初の訪問から 20 年経過し地域の拠点として皆に愛される施設に育ち大変感慨深いことなどを話した。

舞台では、ダンスや銭太鼓、コーラス部による「ふるさと」の合唱など、日頃ブラジル・鳥取交流センターで練習されている各グループが成果を披露し、大きな拍手を浴びておられた。民間訪問団からは日本舞踊や太極拳などが披露され、訪問団もしゃんしゃん傘踊りに参加し、会場を大いに沸かせた。

また、記念式典では、鳥取県発祥のスポーツであるグラウンド・ゴルフの国際的普及の一端とするため、用具一式を県人会に寄贈し祝賀会において斉木議長、林副知事等によるデモンストレーションを行った。

ブラジル・鳥取交流センターで行われるしゃんしゃん傘踊りは県人会を超えて、日系人社会に広がっていると聞いた。交流センターがブラジル鳥取県人会の重要な活動拠点であると同時に、世代を重ねるごとに日系人としてのアイデンティティの希薄化が懸念される中で、自分が日系人であり鳥取県とつながりを持っていることを確認する場となっているとの話があり、交流センターの役割の大きさを再認識した。



祝賀会での芸能披露（コーラス部）



視察団による傘踊り



祝賀会での芸能披露（ダンス）



グラウンドゴルフデモンストレーション

会場の外は、ガーデンパーティーのような雰囲気、県人会員や関係者の方々と様々な話をさせていただいたが、研修経験をされた方々との話が印象的であった。

「日本文化・慣習について机の上で学ぶだけでは自分の子ども達に母国の説明ができない。自ら体験し、良さ悪さを肌で感じる必要がある。鳥取で専門的知識を学習することは当然で、むしろ母国の文化に触れ次の世代に伝えていくことが自分に与えられている使命であると感じた。制度が継続するよう願っている。」と話されていた。また、「日本とブラジルとの交流文化を継続させるためには、日伯交流に熱心な親を中心に子や孫の世代に対し、早いうちから交流のしかけを行っていくことが必要。」と熱心に話をされていた。

ブラジルは日系社会であり、現在 150 万人の日系人がブラジル社会で活躍している。ブラジルでは、日本人や日系人を表す言葉として、「ジャポネース・ガランチード（保証付きの日本人）」、つまり「約束を守り責任を持って役割を果たす人」。教育水準が比較的高く、社会的に高い地位の職業に就職している人が多く、経済水準も高いとされている。また、研修生の中には、日本語が上達し日系大手自動車メーカーに勤務している人もいる。日本語レベルの向上と日本に居住することで得られた文化や日本人の価値観が日系企業に就職する際に役立っているとのこと。この事業（経験）が、ブラジル社会で主要なポジションに就く人材の輩出に貢献している現状を鑑みると、日系人や県費留学生・研修生OBと連携することで、BRICSの一角をなし2億人の人口を擁するブラジルと本県との経済連携・交流の可能性を秘めていると感じた。

また、現在ブラジル鳥取県人会は、日系1世である本橋会長を中心に長年にわたり県人会の活動を行っている。本橋会長は、昨年3月ブラジル日本都道府県人会連合会会長に就任するなど日本とブラジルの交流の架け橋となって精力的に活動されている（昨年7月安倍総理、今年10月秋篠宮ご夫妻の訪日対応）。現在のブラジルの日系人社会は、3世、4世の時代に入り、家庭においても日本語を使う機会が減っているなど日本との繋がりを意識する機会が減っており、会長は日ごろからこういった状況に危機感を感じ、母県を意識した活動を重視しているとのことであった。

日ごろから県人会の活動を意識しつつ、現在活発に実施されている民間レベルでの交流事業が永続的に実施されるよう、県議会としても応援していくべきと感じた。

(2) ブラジル日本移民史料館視察

ブラジル日本移民史料館は、ブラジル移民 70 周年を記念して昭和 53 年 6 月に日伯文化協会ビルの 7 階から 9 階に開館。日本移民の暮らしぶりや社会的な背景を紹介する史料館である。

ブラジル日本文化福祉協会の呉屋新城会長、山下副会長の案内のもと大変丁寧に説明いただいた。

館内はパネルや模型、写真、ビデオ等を活用して日本人移民の軌跡を詳しく紹介している。7 階展示場では、明治 28 年日本・ブラジル国交樹立から移民受入れのための制度的枠組みが設定されるまでの期間に関する資料を展示している。特に目を引いたのは明治 41 年 781 名の移民を乗せてサントス港に到着した「移民船・傘戸丸」の模型と当時の労働風景を描いた絵画、再現された開拓小屋であった。移民初期の時代に、期待と不安を胸に言語も分からず上陸し、過酷な労働と慣れない気候に耐えながら生活されてきた姿を拝見し胸が痛んだ。また、生活の中から人々が苦勞と工夫を重ねて生み出した生活用具や、ブラジルの作物に合わせて改良した作業道具など展示されており、大変興味深かった。

8 階展示場では「日本移民の貢献」、「ブラジルと日本が対立した第二次世界大戦」、「戦後ブラジルにおける日系社会の再編成」と 3 つのテーマにわけて展示されている。第二次世界大戦ではブラジルと日本が対立したため、移民内部で日本の敗戦を信じないグループと敗戦を受け入れるグループとの対立が起こり死者も出たことは、日本移民の歴史で最も暗い時代であったと説明を受けた。遠いブラジルの地で母国を思うばかりに同じ劣悪な境遇の中でも日本人同士が対立してしまう黒歴史があった事に非常に心を痛めた。

9 階展示場は宗教・音楽・舞踊・映画・文学等の各分野における日伯交流について展示されていた。



呉屋新城会長から説明を受ける



ブラジル移民資料館を訪問した訪問団

呉屋新城会長、山下副会長には大変丁寧に説明いただいた。

先人が受けた労苦、それを乗り越えてきたことは日本人として大変誇りであり、今その精神を引き継ぐ日系人がブラジル社会を支えている存在である事に特別驚きを感じない。我々は移民の歴史を認識した上で、鳥取県とブラジル鳥取県人会との交流をより一層深めることが求められていると確信した。

(3) ブラジル鳥取県人会主催歓迎交流会

サンパウロ市内で、ブラジル鳥取県人会の会員約 20 名との意見交換会を開催した。ブラジルでの生活の様子や県人会の取組、鳥取県への思いなどについて、様々な話をお聞きすることができ、県人会の皆様と懇親を深めるだけでなく、ブラジルとの友好関係を深める必要性を改めて実感することができた。

交流会に参加された県人会会員の皆さんは、日系 3 世以降の世代が比較的多かったが、留学・研修生として日本での研修経験を積んだり、仕事上日本語を使用する機会が多いためかほとんどの方が日本語で意見交換することができ大変驚いた。日系人の子弟は簡単な日本語であれば理解できる人が多いという。

これまで県では技術研修員や留学生受け入れ事業を長年実施し、彼らは帰国後も 300 家族を束ねるブラジル県人会で要職を務めるなど、県人会活動にも積極的に参加している。世代を重ねるごとに互いの関係性が希薄になると危惧されるなか、次世代の交流を担う人材がいることは大変心強いと感じた。



歓迎交流会

交流会終了前に濱崎議員から県人会の皆さんに、あいサポート運動についてリーフレットをもとに概要説明を行った。参加者皆さん趣旨に賛同され、濱崎議員から 1 人 1 人あいサポートバッジを配付した。本橋県人会長も、取組について検討していく旨の発言があった。



ブラジル鳥取県人会員の皆さん
(あいサポーターリーフレットを手に)



本橋会長を囲んで

(4) 「ブラジルー鳥取友好の森」記念植樹

ブラジルー鳥取友好の森は、サンパウロ州環境局森林院の森林公園内に位置する。ブラジル鳥取県人会は、平成 24 年の県人会創立 60 周年記念事業の一環としてサンパウロ州環境局森林院の協力を得て公園内に植樹を開始。訪問団全員この植樹プロジェクトに賛同し植樹を行った。また、ブラジル鳥取友好議員連盟もこの趣旨に賛同し、後日、県人会による植樹を行っていただくことになっている。

このプロジェクトは、県人会の山添源二第二副会長が森林院に 37 年間勤務し、前総裁も務めた生物学者であることから、山添副会長が中心となり森林院との協議や鳥取大学農学部や県林業試験場への相談を重ね、植樹への賛同者を募って準備を進められてきたという。

友好の森には、再生・保護が叫ばれている Mata Atlântica (マタ・アトランチカ：ブラジル大西洋海岸林) の代表的な樹木 50 品種約 200 本を植樹・管理して、サンパウロ市民にマタ・アトランチカに対する認識を深めてもらう意図もあるという。なお、マタ・アトランチカはポルトガル人のペードロ・アルヴァレス・カブラルがブラジルに上陸した 1500 年当時、その面積はブラジル全土の面積約 15%、130 万km²と推計されているが、開拓に伴って大量に伐採され現在は 1.2%、10 万km²まで減少したとされている。

植樹にはフェルナンド・デシオ森林院副総裁も立ち会い、「鳥取と森林公園を繋ぐ集まりができて大変嬉しい。この友好関係を末長く続けたい」と挨拶した。

なお、今回植樹した樹木は同森林院と県人会が協力して管理していただくことになっている。森林は国土の基盤であり、この記念植樹においても森林の大切さを改めて実感した。我々の手で植樹した木々が今後世代を超えて受け継がれていくことを思うと、大変感慨深いものがある。



記念植樹会



植樹協賛者の氏名が刻まれたプレート



サンパウロ州環境局森林院の前にて

(5) 日本移民開拓先没者慰霊碑参拝

ブラジル日本都道府県人会連合会に案内いただき、サンパウロ市のイビラプエラ公園内に昭和50年に建立された日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝した。

慰霊碑の建立以来今日まで、天皇皇后両陛下をはじめ政府高官をはじめ各県知事、県議会議員団、一般訪伯団が多数参拝している。6月18日の「移民の日」に行われる慰霊碑参拝は日系人の公式行事となっており、ブラジル日本移民の心情的拠点となっている。

ブラジル日本移民の歴史には、言語、風俗、習慣が全く異なる地で、医者にもかかれずマラリアなどの風土病で倒れた移民や、祖国訪問を悲願としながら果たせずに亡くなられたりした苦闘の時代を生き抜いた先駆移民がいることを忘れてはならない。そうした初期開拓移民の入植地で葬られた方々の墓地が、入植地の移転や家族の帰国などで祀る人がなくなり、雑草が生い茂り、無縁仏になっていることに心を痛めた日本海外移住家族会連合会の藤川辰雄事務局長らが中心となってこの慰霊碑建立の働きかけを行ったという。

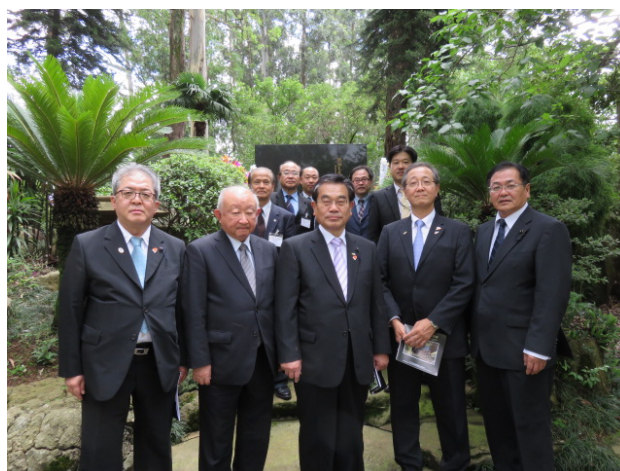
訪問団全員、慰霊碑に献花して、亡くなった移民の皆様の御霊に哀悼の誠を捧げた後、慰霊碑の地下にある霊廟に入り、祀られた平和慈母観世音菩薩木像、地藏菩薩像、過去帳を前に焼香し、手を合わせて冥福を祈り、記帳した。



日本移民開拓先没者慰霊碑



記帳の様子



慰霊碑前にて

(6) 在サンパウロ日本国総領事館表敬訪問

ブラジル連邦共和国の政治・経済情勢や日系社会の状況、リオデジャネイロオリンピックに向けた準備状況等について、在サンパウロ日本国総領事館の中前総領事と意見交換を行った。

中前総領事の説明は以下のとおり。

ブラジルの人口は約2億40万人で世界5位。20年にわたる軍事政権の後、昭和60年に民政移管。連邦共和制をとり大統領と二院制の議会を有する。初の女性大統領となった現ルセーフ大統領は再選を果たしたが、国営石油公社ペトロbrasに絡む汚職問題で弾劾の動きが活発になっている。

実質GDP成長率は下降基調にあり、平成23年3.9%、平成24年0.9%、平成25年2.3%、平成26年0.1%、今年は-2.7%と予想。豊富な資源や食料を有するほか航空機産業を中心とした振興工業国ではあるが、インフラ整備特に都市部の道路整備の遅れが目立つ。

サンパウロ州はブラジル全体面積の約3%であるが人口は4,360万人と全体の約22%を占める。ブラジルの商工業と金融の中心として日本企業の進出・投資が活発で、2億人の国内市場の中心地であること、来年のリオ五輪への期待、日系社会への期待等が日本企業にとって魅力的な要因として挙げられる。日本企業の進出はこの10年で50%以上増加。トヨタ、みずほ、麒麟、旭硝子のほか、教育の公文（くもん）の成長が著しい。子どもへの教育投資にとどまらず、大人の公文式も好調とのこと。所得格差の広がり背景に、社会人となっても勉強し大学に入学することで社会的ステータスを得て厚遇を求めていく実態があるとのこと。

日系人はブラジル全体で160万人を超えたと言われ、サンパウロでも100万人が様々な分野で活躍している。ブラジル農業や製造業等様々な分野の発展に大きく貢献した先人の活動は今もなおブラジル社会で高く評価されており日本人への信頼が高い。今年7月に開催された「ブラジルの日本まつり」（フェスティバル・ド・ジャポン）では3日間で20万人を超える来場者があった。

今年のサッカーワールドカップは景気への刺激に繋がらず、リオ五輪についても経済的なインパクトが少ないせいか、サンパウロではあまり盛り上がっていないのが実態とのことであった。



中前総領事表敬訪問

中前総領事から長時間にわたり大変丁寧な説明をいただいたことに感謝している。総領事の「日系人は日本に祖先がいること、優秀な民族の血が流れていることを『資

産』であると思っている。これは日系人以外もそのように感じている。ブラジル社会は日系人で成り立っているのは事実。日系人をビジネスの世界にどう取り込んでいくかが鍵となっている。これは各県が実施している交流事業にも言えること。日系人を育成できるのは日本の環境であり、将来に向けて見所のある人材を日本に送り込み、帰国しても疎遠にならないよう日本にいる時から繋がりを意識することが交流事業の鍵となる」。大変印象に残る言葉であり、その意識を持つことが重要であると感じた。

(7) 松柏学園・大志万学院訪問

本県のブラジル民間交流団体と交流を行う松柏学園・大志万学園を民間団とともに訪問した。

松柏学園は昭和 27 年、川村真倫子氏が松柏学園の前身となる松柏塾を開校。日本語学校として、日本語の習得のみならず日本文化を理解しブラジル国の向上に役立つ人材を育成することを目的に運営されている。

また、川村真倫子氏は平成 5 年、日本語教育を幅広く末長く継続させる目的で大志万学院を設立。松柏学園は語学学校であるのに対し、大志万学院はブラジル教育局が認可したブラジル義務教育学校として幼稚部（17 人）・小学部（21 人）・中学部（23 人）を設けている。なお、現在は娘である真由美氏が校長を務めている。

両校はサンパウロ市内でも有数の高級住宅地に位置し、長く急な坂が続く高台に位置している。正面玄関には習字で書かれた訪問団全員の氏名と歓迎の文字が飾られ、生徒代表から挨拶を受け控室に案内いただいた。松柏学園、大志万学院とも同一敷地内で運営され、校内は授業で使用する日本語教材にあふれ、百人一首の各生徒の理解度を示す表が掲げられており日本語教育が徹底されていると感じた。

校内見学後は講堂に移り歓迎式典、引き続き歓迎懇談会を行った。生徒主導の歓迎式典で歓迎の言葉を受け、歓迎懇談会では、各生徒の父兄が前日夜から準備したブラジルの家庭料理等の提供を受けるなど、多大なる歓迎を受けた。



校内見学の様子

(左)川村校長 (右)百人一首の生徒ごとの理解度を示す表

松柏学園、大志万学院と本県との交流は、平成 2 年の訪日使節団受入れに始まり、以降隔年での受入をブラジル民間交流団体を中心とした鳥取ブラジル交流団体連絡協議

会により行っている。直近では、今年1月23日から25日にかけて24名の生徒が青谷高校との交流、ホームステイ体験、スキー体験等を行ったところ。生徒からは「鳥取県の豊かな自然が印象に残っている。来県できなかった生徒にチャンスがあれば行くように勧めた」「有意義な時間を過ごすことができた。流ちょうに日本語で会話することはできなかったが、次回の訪問が叶ったら日本語能力をもっと身につけてたくさん話してみたい」との話があった。

今回の訪問を通じて、ブラジルと日本・鳥取県という、地理的には遠い関係にある中で、使節団の受入れなどの交流事業を継続しながら「絆」を大切にしていかななくてはならないと確信した。併せて、川村校長から日本人の心の温かさについて話があったが、我々も日ごろ情の中で生活する日本人としての誇りを持ちながら相手方を敬う気持ちを忘れてはならないと意識させられた。



歓迎式典の様子



生徒達との懇談



訪問団へのもてなしの数々
玄関には1人1人の訪問団の名前が掲示

(8) 東山農場視察

日本移民にも縁の深いコーヒー農園である東山農場を本橋会長とともに視察した。

東山農場は、サンパウロ第3の百万都市であるカンピーナスから僅か 12 kmの近郊の大規模コーヒー農場。総面積 900ha のうち約 300ha にて 150 万本のコーヒー樹を栽培し、年間 500-600 万トンのコーヒーを生産。NHK 総合テレビドラマ「ハルとナツ・届かなかった手紙 (※)」のブラジルロケ地にもなった。

(※) ブラジルに家族とともに3年間の予定で出稼ぎに出た長女ハルと、感染病のため、渡航が許されず日本に残された妹ナツが、1934年より2005年までの71年間離れ離れとなり、ブラジルと日本に分かれ、苦勞して過ごすことを余儀無くされた二人姉妹の物語を描いた、橋田壽賀子氏脚本のドラマ(平成17年10月放映)

なお、東山農場の創設者岩崎久弥氏は、三菱創始者岩崎弥太郎氏の長男で、現在の社長岩崎透氏は弥太郎氏の曾孫にあたる。また、岩美町出身の初代国連大使澤田廉三氏の妻美喜は弥太郎氏の孫(久弥氏の長女)で親戚にあたる。

岩崎久弥氏が1927年にこの土地を購入する以前から農場には多くの奴隷が働いており、1888年奴隷制廃止後もイタリア移民と日系移民約150人が営農活動を行っていた。敷地内には農場のほか奴隷小屋や移民住宅等当時の建築物がそのまま残り、農場主が生活する建物には富の象徴であった漆喰や硝子を施した壁が残り、当時の面影を残している。現在は20家族50人が住み込みで働いている。

農場の奥には敷地内を一望できる高台展望台があり、「一心亭」と名付けられている。これは奴隷同士の喧嘩が絶えなかった当時、奴隷が頭を冷やすために農場主が建設したもので同じ日本人同士心を1つにという願いが込められたものである。

この農場においても、日本移民の負の歴史を感じる事ができた。農場内でも当時、日本の敗戦を信じない「勝ち組」と敗戦を認めた「負け組」との対立が起こり、移民住宅の壁には「負け組」の家に嫌がらせをした落書き「国賊」の文字が今もなお残っていた。



高台展望台から望むコーヒー農場



移民住宅に残る「国賊」の文字

農場視察後は、岩崎会長との食事会を行った。

東山事業の一環として農場のほか、日本酒「東麒麟(あづまきりん)」、醤油、ミリン、味噌、米酢等の和食調味料を別会社「東山農産加工」で製造。ブラジルでは近年健康ブームで日本食が注目されているが、ブラジルでは正しい調味料の使われ方がされていないのが現状。調味料は素材本来の味を引き出すための隠し味であり、日本的

な調味方法の魅力を評価してもらい日本文化をブラジルの食卓にも提供し健康にも良い料理を楽しんでもらえるよう取り組んでいるとのこと。

視察団からは、本県には魅力的な食材が豊富にあるので、来県される機会があれば是非とも食していただき海外市場を対象とした食のブランド化に向け監修を依頼した。



東山農場 岩崎会長



多くの著名人の訪問記録が残る

(9) サンパウロ美術館見学

1947年に設立された美術館で、中世から現代に至る各時代の西洋美術の名品を数多く収蔵している。モネ、ルノワール、ゴッホ、ゴーギャン、ピカソ、モジリアーニ等そうそうたる有名画家の作品が収蔵されており、アメリカ、ヨーロッパの美術館以外で質が高くまとまった美術館は他になく「奇跡の美術館」と称されている。

視察当日は施設改修のため、残念ながらこれらの作品を見学することはできなかった。